

アクティブ・ラーニングの実践とルーブリック評価

〈後編〉

本誌前号では、アクティブ・ラーニングの評価においてルーブリック評価が最適である理由を述べ、ルーブリック評価の体系まで示した。今号では、それを受けて、ルーブリック評価の具体的方法を示すとともに、ルーブリック評価表を作成する手順を詳細に述べる。また、ルーブリック評価表を作成することがアクティブ・ラーニングの推進のための研修にもなっていることを示す。

コアネット教育総合研究所 所長 松原 和之

ルーブリック評価表の基本形

前号において、ルーブリック評価の体系は「学校ルーブリック」「教科ルーブリック」「単元別ルーブリック」の三層構造であることを示した。続いて、ここでは、それらのルーブリック評価表の基本形について説明しておこう。ルーブリックには様々な形式があるので、ここで紹介するのは1つの典型例だと思っていただきたい。

ルーブリック評価表は、「評価規準」と「評価基準」をマトリクス形式で記載したものである。図表4のように、表側(表の左側部分)に「評価規準」を、表頭(表の上部部分)に「評価基準」の段階を書く。そして、そのマトリクスの表に「評価基準」を表す「記述語」を書く。「評価基準」の段階は、3～5段階が一

般的である。大学では5段階で「秀」「優」「良」「可」「不可」としたり、「S」「A」「B」「C」「D」と表記することが多いようだ。中等教育では「5」「4」「3」「2」「1」でもよいだろう。一番下の評価(例えば「不可」)は、「可」に達していないというだけだと理解して、記載しない場合もある。5段階ではなく3段階で記載する場合もある。基準を何段階表記するのかは様々だが、筆者は5段階で記載することをお勧めしている。3段階では各段階に開きが大きくなり、生徒が学習する過程で次の段階を目指す意欲を促しにくくなるからだ。また、一番下の段階も、生徒自身がどの位置にいるのかを自己認識するためには記載しておいたほうがよいと考えている。

表側の「評価規準」の項目数と表頭の段階数の掛け算により何マスかの表ができるので、そのマスの1つひとつに「評価基準」

図表4 ルーブリック評価表の基本形

	評価基準				
	S	A	B	C	D
評価規準①	①-S	①-A	①-B	①-C	①-D
評価規準②	②-S	②-A	②-B	②-C	②-D
評価規準③	③-S	③-A	③-B	③-C	③-D

評価規準ごとに基準を表す「記述語」を記す

の「記述語」を埋めていくことになる。「記述語」は「何ができればその評価になるのか」を明確に記述しなければならない。また、各段階の基準の差が質的に有意な差であるように書き分けられていなければならない。

一般的ルーブリックの事例 ～バリュー・ルーブリック

日本の初中等教育では「単元別ルーブリック」の事例は多いので、書籍やホームページ等で検索して参考にしてほしい。ただし、一般的ルーブリックの事例は少ない。ここでは大学の事例を紹介しておこう。

米国の大学においては、大学の枠を超えて一般的ルーブリックが作られている。それがAAC&U (Association of American Colleges and Universities) が作成した「バリュー・ルーブリッ

ク (VALUE rubrics =Valid Assessment of Learning in Undergraduate Education)」である。

「バリュー・ルーブリック」は15の領域にそれぞれ5～6の「評価規準」を設けている。15の領域とは、①探究と分析、②批判的思考、③創造的思考、④文章コミュニケーション、⑤口頭コミュニケーション、⑥読解、⑦量的リテラシー、⑧情報リテラシー、⑨チームワーク、⑩問題解決、⑪市民参加、⑫異文化知識・能力、⑬倫理的推論、⑭生涯学習の基礎とスキル、⑮統合的学習である(注5)。そのうちの文章コミュニケーションのルーブリック表を松下(2012)から引用し、例として挙げた(図表5)。5つの「評価規準」に4段階の「評価基準」を設けている。「バリュー・ルーブリック」では、レベル1を「ベンチマーク」と呼び、大学に入学してくる学生にみられるレベルで設定している。つまり最低基準ということだろう。レベル4は「キャップストーン」と呼び、学士号を授与される学生に期待されるレベルを表してい

図表5 文章コミュニケーション VALUE ルーブリック

	定義			
	キャップストーン 4	マイルストーン 3 2		ベンチマーク 1
文章作成の文脈と目的 読者・目的や、課題をとりまく状況の考慮を含む	文脈・読者・目的について完璧な理解を示し、それによって、与えられた課題に対応し、作品のあらゆる要素に焦点をあてている。	文脈・読者・目的について適切な理解を示し、与えられた課題(例えば、読者・目的・文脈を結びつけること)に明確に焦点をあてている。	文脈・読者・目的や与えられた課題(例えば、読者の認知や了解事項への気づきを見せ始めること)への自覚を示している。	文脈・読者・目的や与えられた課題(例えば、読者としての授業者や自己の期待)に対し最低限の注意を示している。
内容の展開	適切に関連性があり説得力に富む内容を用いることによって、科目の習得ぶりを示すとともに、書き手の理解したことを伝え、作品全体を形づくっている。	適切に関連性があり説得力に富む内容を用いることによって、学問分野の文脈の中でアイデアを探究し、作品全体を形づくっている。	適切に関連性のある内容を用いることによって、作品の大半を通じて、アイデアを展開・探究している。	適切に関連性のある内容を用いることによって、作品の何か所かで、シンプルなアイデアを展開している。
ジャンルと学問分野の約束事 特定の形式や学問分野の文章作成に期待される公式・非公式のルール(用語集参照)	特定の学問分野や文章作成課題に関連する広範な約束事(構成、内容、提示、書式、文体選択を含む)に対し、細かい注意を向けうまく遂行している。	特定の学問分野や文章作成課題に関連する重要な約束事(構成、内容、提示、文体選択を含む)を一貫性をもって使用している。	特定の学問分野や文章作成課題にふさわしいものとして、期待されることが(基本的構成、内容、提示など)に従っている。	基本的構成や提示のしかたについて一貫した体系を使おうとしている。
資料(ソース)と根拠(エビデンス)	当該の学問分野やジャンルにふさわしいアイデアを展開するために、質が高く、信頼でき、関連性のある資料をうまく使いこなしている。	当該の学問分野やジャンルの中に位置づくアイデアを裏づけるために、信頼でき、関連性のある資料を一貫して使っている。	当該の学問分野やジャンルにふさわしいアイデアを裏づけるために、信頼できる(もしくは関連性がある)資料を使おうとしている。	アイデアを裏づけるために、資料を使おうとしている。
構文と技法を操ること	読み手に明確かつ流暢に意味を伝えることができる格調ある言葉遣いをしていて、ほとんど全く誤りがない。	読み手に意味を伝える直截的な言葉遣いをしていて、減多に誤りがない。	文章に数か所誤りを含むが、明確に意味を伝える言葉遣いをしていて、	用語法に誤りがあるために、意味の伝達が妨げられるような言葉遣いをしていて、

(出典) 松下佳代著「パフォーマンス評価による学習の質の評価」

る。その間のレベル2・3は「マイルストーン」、つまりレベル1から4に向かう道のりの道標ということだ。

「バリュー・ルーブリック」は大学における一般的ルーブリックよりももう一段抽象度が高い「メタ・ルーブリック」の位置づけであるが、「一般的ルーブリック」作成の参考になる例といえるだろう。

ルーブリック作成のアプローチ

実際にルーブリック評価表を作成し運用をしようと考え、意外と準備が大変だ。ここからは、ルーブリック作成の手順について説明していきたい。

ルーブリックの作成手順には、一般に、ボトムアップ・アプローチとトップダウン・アプローチがある。つまり、授業実践の中から基準を一つひとつ作り上げていくアプローチと、学校の教育理念や教育目標を解釈して先に「学校ルーブリック」を作るアプローチである。筆者は、これらに対して、「ミドルアップ&ダウン・アプローチ」を提唱している。まず、授業や単元単位でもなく、学校全体でもなく、教科における検討から始めるのである。もちろん、教育理念や教育目標は踏まえるが、「学校ルーブリック」をきちんと作り上げてからそれをブレイクダウンして「教科ルーブリック」を作るのではなく、「教科ルーブリック」の検討から始めて、それを抽象化して「学校ルーブリック」を作り、ブレイクダウンして「単元別ルーブリック」を作るのである。

西岡(2010)は、パフォーマンス評価に関連して、ルーブリック作成の手順を以下のように説明している(注6)。^①パフォーマンス課題を実践し、生徒の作品を集める。^②ぱっと見た印象で、作品を「5. すばらしい」「4. 良い」「3. 合格」「2. もう一步」「1. かなりの改善が必要」の5段階で採点する。^③採点結果に即して作品を分類する。^④それぞれの点数の作品群を見て、特徴を読み取り、記述語を書く、という段取りである。

まず授業ありきで、その結果を分析する中で「評価基準」を作っていくアプローチなので、まさにボトムアップといえるだろう。この方法の良い点は、実態に即した正確な「評価基準」が作成できることだ。しかし、一方で目標からのアプローチではないので、全体の中での水準を見失いやすいということと、何よりも作成に時間がかかるということがデメリットである。

一方、大学ではトップダウン・アプローチをとるところが多い。横浜国立大学では、大学教育総合センター FD推進部で、ディプロマ・ポリシーから「コモン・ルーブリック」(全学共通のルー

ブリック)を作成し、それを「授業別ルーブリック」に落とし込むための手順をマニュアル化して展開している(注7)。

大学の場合は、先の「バリュー・ルーブリック」をはじめ、先行する事例が多いため、「学校ルーブリック(一般的ルーブリック)」を作ることが比較的容易である。ただし、初中等教育においては、事例がほとんどないため、現段階でトップダウン・アプローチをとるのは難しいと思われる。また、詳しくは後述するが、ルーブリックを作成すること自体が教員の共通理解をつくり、授業デザイン力を向上させる研修の意義を持つため、一部の組織や管理職で作成してから展開するよりも、全教員が参加して議論する進め方をとるほうが実質的である。そのために、教科で話し合い「教科ルーブリック」から作り始める「ミドルアップ&ダウン・アプローチ」を推奨するのである。

ルーブリック作成の手順 ～「評価基準」の作成

ルーブリック作成の手順を順番にみていきたい。まずは、教育理念や教育目標から学校としての「ディプロマ・ポリシー」を作成する。「ディプロマ・ポリシー」とは、大学等で学生が卒業する時に必要とする能力を示した学位授与方針のことであるが、あえてここでは高等学校にも援用している。つまり、生徒が卒業までに身に付けるべき力をまとめてみるということである。「ディプロマ・ポリシー」は、文章表現で構わないが、それらを分解して、身に付ける力の分類(コンピテンシー・カテゴリ)を5～10程度の単語で整理する。これは、先述の「バリュー・ルーブリック」でいう領域にあたる。ここまで、まず学校として用意しておく(図表6)。

次に、全校研修などの機会を設け、「ディプロマ・ポリシー」と「コンピテンシー・カテゴリ」を全教員で共有し、それを踏まえて、教科ごとに話し合いながら「教科ルーブリック」を作成していく。その際、まず「評価基準」の検討から始める。「コンピテンシー・カテゴリ」の枠組みに従い、さらにそれらをブレイクダウンして、自分たちの教科として、具体的にどのような力を身に付けさせたいかを考えていく。カテゴリごとに3～5の「評価基準」を設定していく。この過程を「一次修正(モディフィケーション)」という。

ある程度、教科ごとに設定をした段階で、全教員が集まり、他教科に対して自教科で設定した「評価基準」を発表し、全校で共有しつつ調整をしていく。表現の大まかさ細かさの調整や、

似たような表現の統一などである。これを「一次調整(キャリアレーション)」という。

ここまでで、「コンピテンシー・カテゴリ」が10領域あったとすると、それぞれに3つの「評価基準」を設けたら、教科ごとに30ずつの「評価基準」が出来上がったことになる。

図表6 高校のディプロマ・ポリシーのイメージ

〇〇学園高等学校 ディプロマ・ポリシー
本校の教育理念(平和と国際貢献)を深く体得し、幅広い知識と教養、知識を活用した問題解決力、主体的に多様な人々と協働できる力を身に付ける。
身に付ける力(コンピテンシー・カテゴリ)
① 知識獲得力 ② 思考力 ③ 創造力 ④ 問題解決力 ⑤ 文章コミュニケーション力 ⑥ 口頭コミュニケーション力 ⑦ 異文化理解力 ⑧ 組織的行動力 ⑨ 自己実現力 ⑩ 市民力

ルーブリック作成の手順 ～「評価基準」の作成

この「一次調整」後の「評価基準」に対して、今度は各教科で「評価基準」を設定していく。ここがルーブリック作りの一番難しいところである。

「評価基準」をS・A・B・C・Dの5段階で書き分ける想定で説明しよう。目安としては、Dは赤点である。Cが高等学校卒業時の最低ラインである。そして、Aが高等学校卒業時の到達目標で、Bはそのマイルストーン、Sは高等学校レベルを超えて特に秀でている理想目標をイメージする。

「評価基準」を作成する場合は、まずその「評価基準」を構成する要素を書き出すことから始める。例えば、「論理的思考」という「評価基準」があったとしよう。その構成する要素は「複雑な事象を整理すること」「それを構造化すること」「自分の意見や手順を論理的に展開できること」「相手を納得させられるこ

と」等である。「複雑な事象を整理し、構造化しようと努力をしている」ことが最低ラインだと考えれば、これをCとする。そうすると、Dは「複雑な事象を整理し、構造化できない」となる。Aが到達目標だとすると「複雑な事象を整理し、構造化できる。自分の意見や手順を論理的に展開できる」ぐらいが高校生の到達目標であろう。さらに、それを超えて相手を納得させられるぐらいになると理想だと考え、Sは「複雑な事象を整理し、構造化できる。意見や手順を論理的に展開し、相手を納得させることができる」となる。最後にマイルストーンであるBは、CとAの間で「複雑な事象を整理し、構造化できる」となる。例えば、このような思考の過程を経て考えていく。

ルーブリック作成の手順 ～「学校ルーブリック」の作成

このようにして、各教科で「評価基準」を記述できたら、また全教科で集まって「二次調整」を行う。基準として設定した水準が揃っているかどうかを検討する。この際、同じ「コンピテンシー・カテゴリ」に入る「評価基準」を各教科で集め、教科としての特長を除いて、カテゴリごとに5～10程度の「評価基準」に統合する。9教科にそれぞれ3～5の「評価基準」があれば、のべ30～40程度の「評価基準」がある。この中にはほぼ同義のものがあると思われるので、それを統合し、特定の教科にしか適用されない基準を除いて、5～10程度に絞るのである。このことにより、「二次調整」の過程の中で「学校ルーブリック」が作られていく。「学校ルーブリック」が出来上がったら、その「評価基準」の水準を参照して、「教科ルーブリック」の「評価基準」も修正していく。

こうして、「教科ルーブリック」と「学校ルーブリック」が完成する。あとは、単元で学習する内容に合わせて「単元別ルーブリック」を作成することになる。この作業は、「教科ルーブリック」の中から必要な「評価基準」を選定することになる。

ルーブリック作成の手順 ～「単元別ルーブリック」の作成

この時に2つの方法がある。それは、「評価基準」を変えない方法(固定法)と変える方法(変動法)である。固定法をとる立場は、あくまでも卒業までのレベルを意識させながら学習させる意義を重視する。「コーチング・ルーブリック」として形成

コアネット教育総合研究所 所長



まつばら かずゆき
松原 和之

一橋大学社会学部で教育社会学を専攻。卒業後は企業の経営企画部門、三和総合研究所のコンサルタントを経験し、2000年よりコアネット教育総合研究所主席研究員、2003年より同所長、2009年より国際大学グローバル・コミュニケーション・センター客員研究員。数多くの学校改革支援プロジェクトを手掛け、先生方と一緒に学校を変革してきた実績を持つ。専門分野は、広報・生徒募集改革、教学(カリキュラム)改革を始めとする学校経営全般。「変革は現場から起きる」をモットーに、理論だけではなく、実践的なアドバイス、サポートを行い、現場の教員を巻き込みながら、必ず成果が出るまで支援することを信条にしている。

ルーブリック作成を通じた教員育成

最後に、このルーブリック評価表の作成と運用を教員の研修として活用する視点について述べておきたい。ルーブリック評価表を作成する過程はかなり労力と時間を要する。従って、この一連の過程を外部のコンサルタントなどに外注することが考えられる。しかし、完全に外注してしまうと実質的に良いものができないし、せっかくの教員の育成の機会を逃してしまうことになる。

筆者がルーブリック評価表の作成をお手伝いする際は、せっかくなので、教員の研修を兼ねましょう、と提案をしている。つまり手間がかかる作業的な部分は外注してもらって構わないが、考える部分は教員に参加してもらうのである。

実は、ルーブリックの「評価規準」や「評価基準」を考えることは、自らがやっている教育への深い理解を促し、新たな気づきを得る良い機会なのである。「教科ルーブリック」を作成する際には、学校としてのディプロマ・ポリシーをきちんと理解しなければならぬ。そして、同じ教科に属する教員同士で、生徒たちにどのような力を身に付けさせたいかということ議論することは、この上なく良い意識共有・統一の機会である。

また、人から与えられた評価表ではなく、自分たちで苦労して作った評価表であれば、心を込めて運用しようという意識にもなるだろう。時間はかかるが、それだけの価値は十分ある。私たちコンサルタントは、議論や思考の枠組みを示し、話が前に進むようにファシリテーションしている。そして、他校の事例などを提示して、先生方の思考力や創造力をサポートする役割だ。

ルーブリック評価表は最初から完璧なものを作ることはできない。また、一度作ったなら、そのままずっと使えるものでもない。運用しながら、徐々に良いものに改善していくものである。その意味では、完全に運用できるまでには2～3年はかかるものなので、将来を見据えて、早めに取り掛かるべきだと思う。

本当の意味でのアクティブ・ラーニングを促進したいのであれば、ルーブリックの検討を同時に行ってほしい。

注5) 松下佳代著「パフォーマンス評価による学習の質の評価—学習評価の構図の分析にもとづいて—」(2012年、京都大学高等教育研究第18号)
注6) 西岡加名恵他著「パフォーマンス評価にどう取り組むか—中学校社会科のカリキュラムと授業づくり」(2010年、日本標準ブックレット)
注7) 横浜国立大学大学教育総合センター FD推進部「教員向け授業別ルーブリック作成マニュアル」(2015年)

するかだ。

基本は、教員による「観察」、生徒による「自己評価」、生徒同士の「相互評価」の3つである。それらを統合して、教員が「確認」「分析」を行って評価する。

まずは、学習を始める前に、ルーブリック評価表を使って生徒に目標を明示する。「この単元では、この規準でBを、この規準でCを目標とします。」という具合に。

そして、授業における活動と評価を結び付けられるように説明をする。単元ルーブリックは評価規準を5～6個に絞っておき、この単元においては、知識・技能以外にどのような力を身に付けなければよいかを明確に意識させることが大事だ。

あらかじめ生徒にルーブリックを提示することは、学習目標を強く認識させることになり、メタ認知力の向上に寄与する。いま自分が何のために学習しているのかが認識でき、自分の長所・短所を把握することができる。

授業中は、生徒が活動している姿を教員が「観察」して評価を行うのであるが、チームティーチングなど、複数名の教員が立ち会うほうが評価はしやすい。平常授業で「観察評価」を行うことが難しくければ、評価を行う日を決めて、その時だけ複数名の教員が立ち会って評価を行うとよいだろう。

そして、授業の最後に必ず振り返りを入れる。原則は「自己評価」で構わないが、プレゼンテーションやディスカッションなどを行った場合は生徒同士の「相互評価」も可能だ。

振り返りに使うシートは、ルーブリックをそのまま援用する。ルーブリックの評価基準のままアンケート形式にして自分で答えさせる。相互評価シートも同様だ。

これらの自己評価シート、相互評価シートを集めて、教員の「観察評価」とあわせて、統合的な評価を行う。生徒へのフィードバックは学期ごとにまとめてでも構わないが、平常授業の中で都度行う方が効果は高い。

自己評価シートや相互評価シートは一旦集めて教師が保管するが、コピーをして本人に戻して自己保管させる。できればファイルを作ってポートフォリオにしておくといふ。生徒自身の振り返りが形成的評価につながる。

成績や評定に使わず、形成的評価を中心に行うのであれば、評価を生徒にフィードバックして生徒がよりよく学べるよう助言をすることが大切である。一方、これを総括的評価として通知表などに記載しようと思うと、現状の制度上では、観点別評価に活かすという方法が一番適切な方法だろう。

ている必要がある。

2つ目のポイントは、「評価基準」の「記述語」は客観的に判断できることでなければならない。「記述語」はコンピテンシーなので、持っている能力ではなく発揮された能力である。それは、表現されたアウトプットであったり、事実、行動などである。「～をしている」「～を述べている」「～を示している」などの表現を使うとよい。

3つ目は、同じ「評価規準」に対する「記述語」は一貫性がなければならない。段階によって、まったく異なることを評価しているようになってはいけぬ。例えば、「プレゼンテーション力」という「評価規準」について、C評価が「声が大きくて聞き取りやすい」、B評価が「指摘しているポイントが明瞭」というように、まったく別視点のものが同規準の中に並んでいるのは適切でない。この場合は別の「評価規準」として扱う。

4つ目のポイントは、「評価基準」の各段階の違いが均等になることが望ましい。C評価とB評価の間の質的違いは、B評価とA評価の質的違いと同レベルになるように設計したい。どこかで飛躍的に違いがあることは望ましくない。

そして、最後の5つ目のポイントは、「記述語」は、平易で分かりやすい表現を使わなければならない。ルーブリック評価表の目的は、教員が評価することもあるが、生徒自身が評価ポイントを理解・認識したり、自己評価できることが大切である。生徒が理解できるレベルの表現でなければならない。

ルーブリック評価表を作成する上では、以上の5つのポイントに注意するとよいだろう。

アクティブ・ラーニング型授業の評価方法

このように「学校ルーブリック」「教科ルーブリック」「単元別ルーブリック」が作られるわけであるが、これらのルーブリック評価表を使って、アクティブ・ラーニング型の授業において、実際にどのように生徒の評価を行っていくのかについて説明しておきたい。

まず、知識・技能が定着しているかについては、従来通りのペーパーテストや実技テストを実施して評価を行うことで構わない。また、文章表現力や思考力、分析力などについては、記述式、論述式のペーパーテストを実施して、その結果をもとにルーブリック評価表を使って評価することができる。

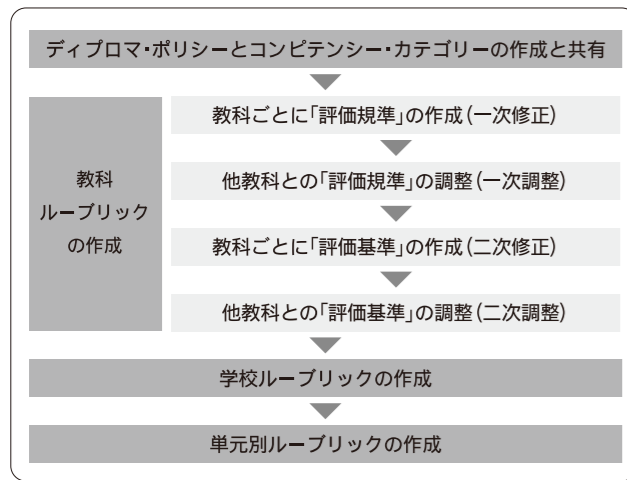
問題は、コミュニケーション力、チームワーク、口頭表現力などのアウトプットが必ずしも紙に表せないものをいかに評価

的評価に使うのであれば、この方法が適している。例えば、中高一貫校で高校卒業までを想定して「教科ルーブリック」を作成した場合、中学生段階では5や4の評価はつきにくい。しかし、あくまでも現段階では3を目標として学習をする旨を生徒に明示し、指導するのである。ただし、高校生になったら5を目指すという、より高い目標があることを意識させておくことで、高い目標へストレッチさせるのである。

一方、「採点ルーブリック」として総括的評価に活用したいのであれば、変動法をとるほうがよい。その学年の水準に合わせて基準を変動させるのである。「教科ルーブリック」における3のレベルを5に引き伸ばして間を埋めるような修正を加える。この場合、その学年でどのレベルを目指すのかを教科で統一見解を作っておく必要があり、手間がかかる。しかし、その学年、その単元に合わせてきちんと「単元別ルーブリック」を作ることにより、妥当性と信頼性のある評価が可能になる。

ルーブリック作成の手順は以上(図表7)だが、ここで作成にあたって注意すべきポイントを整理しておこう。

図表7 ルーブリック作成の手順



ルーブリック作成にあたっての注意ポイント

1つ目は、「評価基準」の「記述語」は、各基準の段階によって質的な変化が表現されていなければならない。「記述語」には「分かりやすい」「より分かりやすい」というような尺度や量的な変化を表現する言葉は使ってはいけない。各段階の差は、徐々に変化するグラデーションのような差ではなく、これが出来たら1つ上の段階の評価になるという明確な質的違いが表現され